

「九歳の壁」はあるのか

―その乗り越え方

「九歳の壁」の正体

「九歳の壁」の正体は、具象思考から抽象思考への移行期に起こる「分からない感」のことである。「分からない」とは、頭の中で「見えていない」ことであり、「見えていない」とは、言葉から導かれて、再現されるべき視覚イメージを、明確には再現していない（意識化できていない）ということである。

具象思考の段階では、具象語が意味している内容が、通常ならば、感覚・感情を伴う原形視覚イメージであったり、対象そのものが具体物であるために、容易に視覚イメージ再現ができるので、「壁」を感じることは殆ど無い。

しかし、抽象思考の段階では、抽象語を明確に視覚イメージ化するには、その抽象語が表している内容を類推したうえで、具象思考時代の豊富な原形視覚イメージを使って再現しなければならぬので、具象思考を味わっていない場合には、類推作用が働かずに、視覚イメージを再

現できなかつたり、曖昧になったりする。



場合と、操作（思考）ができない場合があるが、明確に再現（理解）できれば、操作（思考）は必ずできるようになるので、今回は「言葉を明確な視覚イメージに変換できない場合」を中心に説明する。ただし、ここで言う視覚イメージの「明確さ」とは、思考の妨げになる「写真のような明確さ」ではなく、思考に最適なレベルに再現を制御されている、輪郭が曖昧で白黒の濃淡を生かしたラフなデッサン程度の「明確さ」を指す。

すると、言葉の実体（表している内容）

が「見えない」のだから、「分からない」となるのだ。つまり、「見ようとしている」のに「見ようとしていない」のだから、視線を遮られている「壁」があるように感じる。そこで、その感覚を「壁」と表現するのだ。これが、いわゆる「九歳の壁」の正体である。

また、再現だけでは「理解」までできなく、再現した視覚イメージを操作する（複写・移動・変形・比較すること）が「思考」なので、「分からない感」である「壁」は、再現（理解）ができない

リガー理論

私たちは、主に言葉（文字も含む）を利用して理解、思考、記録をしている。そのため、言葉を知っていれば分かる・考えられる、と思いつ込み、理解や思考の対象そのものまでもが「言葉」である、と（二十年前の私がそうだったように）勘違いをしている人が多いのではないだろうか。ところが、これでは、いつまでたつても「壁」の正体には気付けない。ここで、「言葉」の機能をハッキリさせるために、「言葉のトリガー理論」を提示する。

「九歳の壁」はあるのか—その乗り越え方

「言葉は視覚イメージを再現するためのトリガー（引き金）にすぎない」という理論である。この理論を検証して、言葉の機能を再認識すれば、「壁」の存在と実体を容易に推測することができる。では、簡単に検証する。

例えば、次の文章を理解しようとするときに、私たちは具体的には、どうするだろうか。

「今日、登校中に、優雅に羽ばたく優しい、自分の頭の中で起こることを観察すれば、「理解する（分かる）」とは、言葉から導かれたオリジナルの視覚イメージを意識すること（自信を持って見ること）である」と分かるだろう。

つまり、「壁」を考える上で検討対象となるべきは、言葉の先にある（言葉にリンクしている）視覚イメージということである。

そして、指導上のポイントは、自分が再現した視覚イメージを信じる勇氣を持つようにすることである。この勇氣を持つ力が、自分を信じる力になり、自己肯定感にも育っていく。しかも、この力は全ての力（あらゆる分野での、理解力

・受容力・思考力・判断力・想像力・表現力）の源となる絶対学力の素でもあり、さらには、この自分のオリジナルの視覚イメージを自信を持って意識することが、美意識になり、価値基準になり、判断基準を作り、行動基準になる。大袈裟に聞こえるだろうが、誇張ではない。

「九歳の壁」の越え方は、思っている以上に重要で、その人の一生に関わる。だから、幼児・児童期に「できればどんな方法でもいい」は大変危険な考え方なのである。

「九歳の壁」を感じる場合

「壁」を感じる場合とは、言葉にリンクしている視覚イメージを明確には持っていない（見ることができない・再現できていない）場合である。従って、言葉と視覚イメージとのリンクを意識させれば改善する。

ただし、この時に注意すべきは、実体験を通して記憶されている感覚・感情がある程度再現できる原形視覚イメージまで遡ってリンクさせることである。なぜなら、実感が伴っている言葉を意識させることでのみ、言葉を自在に正確に使う

ことができるようになるからである。

「壁」を感じる子どもに、「読み書き」の強化をしても、根本的な改善は望めない。すべきことは、言葉の実体である視覚イメージを、意識的に再現できるように、文字・言葉の絵図化の指導（視覚イメージ化の体験的学習）をすることである。

目を閉じて「読み聞かせ」を味わいながら自分の過去の追体験を通して、意識しながら視覚イメージを再現することも有効である。算数では、文章問題の文字・言葉を楽しみながら、絵図化することで、感覚・感情を再現しながら（感じ味わう力・感味力を守りながら）視考力（目で見て考える力・視覚イメージの操作力）を活用した思考力養成が可能になる。この力は、国語の読解力にもなる。

ここで、九歳以前にも起こる危険な状態も指摘しておく。「何を言ってもピンとこない」という状態である。具象思考の段階で既に、言葉と原形視覚イメージがリンクしていない場合で、「頭の生活習慣病」なので、日常の生活環境そのものから変えないと、改善は非常に困難である。スローテンポと楽しい会話を味わ

「九歳の壁」はあるのか—その乗り越え方

える生活環境を整えることが最も効果的である。

「九歳の壁」を感じない場合

「壁」を感じない場合でも、良好な場合と危険な場合があるので要注意である。

良好な場合とは、明確な視覚イメージを容易に持てる場合で、意識次第で感情・感情の再現度合いも制御できると理想的である。

具象思考時代に、実感を伴っている言葉を、感じ味わい楽しみながら使い、自然に多種多様な視覚イメージを蓄積し、自由自在に検索・操作できる、視覚イメージのマルチインデックスデータベースを構築している場合である。

盲点実験でも検証されているように、視覚には自動類推作用があるので、豊富なデータベースは、豊富な類推視覚イメージも容易に作り出してくれる。この状態は、「ゆつくり・ジツクリ・丁寧に」生活し、楽しく言葉を味わうことで自然に可能になる。

危険な場合とは、実感の伴わない、知識としての言葉が多量に一人歩きしてい

る場合である。本人はもちろん、保護者・指導者も、この危険にはなかなか気付けない。

言葉を多量に持っているために、その場しのぎの受け答えはでき、問題がないように見えるが、肝心の視覚イメージの意識化ができていないので、「壁」を感じざるべきなのに「壁」を感じない状態が続き、重症化するまで発見されない。本当の思考力を試される問題が出て来て、初めて、自力では考えられないことに気付くが、パターン学習で乗り切ることしかできない状況に陥っている場合が多い。

感じ味わう力である「感味力」を育むべき時期に、先行学習（先取り学習）という、知的系統的学習（暗記やパターン学習）をしている子どもたちに、往々にして見られる現象である。こういう場合には、早急に、「容易に壊れるガラスの自信と危険な優越感」を洗い落とす必要がある。なぜなら、成績 \parallel 学力という勘違いをしていると、貴重な絶好の思考力養成時期を逃してしまうからだ。

ここで、先行学習に多い知的系統的学習の欠点を二つ指摘しておく。まず、この種の学習は系統的にできているが故に、

「原理原則 \downarrow 応用」という手順をとる。

これは、幼児・児童期には危険な演繹的学習法である。なぜなら、自己解決能力の基本（帰納的学習）である「様々な具象 \downarrow 共通項の発見」を自力で突破しなければ、帰納的学習を修得できないので、逆向きの演繹的学習も、スムーズにはできないからだ。学習には、守るべき「学習の優先順位」がある。進化手順を踏まない安易な前倒しは危険である。

もう一つの欠点は、感味力を麻痺させることである。

自然な「壁」の乗り越え方

第一に、言葉を使えるようになる前には、不自然な刺激は排除し、微細な変化も感じ味わうことができるような環境で過ごさせること。できるだけ、自然な時間の流れの中でゆつたりと生活することが、将来、思考に使われる豊かな原形視覚イメージを蓄積するベースとなるからだ。また、時間の流れを人工的に編集されていくものを学習に使うこと（聞き流しも含む）は避けて、この時期は感覚・感情の安定と定着を最優先させるべきである。高速多量の学習は決してしてはな

「九歳の壁」はあるのか—その乗り越え方

らない。本来、ゆつくりの子どものテンポを無視した刺激は、生活全般にわたって、根本的な吸収・消化力を極端に低下させるからである。

第二に、言葉を使えるようになったら、日常的に体験することに言葉を添えて、言葉が体験に深く染み込むように心がけること。ここで、言葉の先にあるもの

(言葉によって導かれる視覚イメージと、その先の感覚・感情)を、言葉と共に体感(ゆつくり意識)すると「壁」は全く感じることもなく、健全な成長ができる。反対に、この時期に、生活の中に無い言葉(死んだ言葉・知識としての言葉)を与えることは、思考回路作成の妨げになるので厳禁である。

思考回路は、工夫の軌跡なので、材料(言葉、特に実感のない言葉や知識)を必要以上に持たせることは、思考回路養成時には逆効果になる。思考回路は、言葉や知識が適度に少なく、しかしながら、深く視覚イメージにリンクしているものを使うときのみ、余裕を持って楽しく増加させることができるからである。

第三に、文章を読むようになったら、「分かる」とは具体的にはどうすること

か、「考える」とは具体的にはどうすることか、を最初に教えることである。すると、読書量に関係なく、理解力も読解力も思考力も育てられる。これらの力は、子どもたちが、元来持っている力なので、気づかせるだけで、連鎖的に発現し始める。

教える側の基本中の基本「教育の統一場理論」

さて、ここで、教える側が知っておかなければならない、基本中の基本を確認しておく。「分かる」とは具体的にはどうすることか。「考える」とは具体的にどうすることか。「覚える」とは具体的にどうすることか。

「分かる」とは、言葉から導かれるべき視覚イメージを明確に意識すること。

「考える」とは、再現した視覚イメージを操作(複写・移動・変形・比較)すること。そして、この「考えることを楽しむこと」が「考える力」人生を楽しむ力「生きる力」となる。「考えるとは、具体的にはどうすることか」を最初に教えると、誰でも楽しく考えることができるようになる。つまり、生きることが楽しくなる。

「覚える」とは記録してある(ある程度の大きさがある対象物を意識して見ると自動的に記録される)視覚イメージを再現する(意識化する)ことなので、暗記という名の下に入力を繰り返すのではなく、意識的に「思い出す」練習をすることが最も効果的な「覚える」練習となる。これらの基本を、容易に実践できる手法を提示しておく。

国語は、読解なら、文章を絵にする

「絵コンテ読解」。音読なら、感じ、味わいながら、各自のテンポを守って少量をゆつくり読む「イメージ音読」。読みは、スラスラ読めても、多量に読んでも、視覚イメージを意識していなければ、ただの発音練習なので要注意。逆に、視覚イメージを楽しめれば、トットツ読みで十分である。漢字の書き(暗記全般)なら、一度も書かずに数秒で書けるようになる「イメージフィックス法」。読みと意味を味わうには、一学年の漢字全てが一つの物語に入っている「漢字読本」。算数は、計算問題なら、数を体感しながら計算できる「指折り算」。指の感覚を味わいながら視覚イメージで計算する

「九歳の壁」はあるのか—その乗り越え方

「デンタクくん」。計算の理屈が一目で分かる「ビジュアル筆算」。五分で無限暗算ができるようになる「横筆算」。三十六個のユニットで九九を全て利用しながら視覚イメージの操作練習もできる「三角視算表」。文章問題なら、面白おかしく物語り仕立てで作られている「(絵で解く)良質の算数文章問題」。但し、文章問題は、言葉の数式にしようとするのではなく、必ず、言葉を絵図にして絵図で最後まで考える。その後で、絵図を式に置き換える練習をする。すると、少ない演習で、計算力、理解力、思考力、読解力という一生使える本当の学力が養成できる。

理科は、実験結果に関する多様な予測視覚イメージ(間違ってもいい)を持つようにし、音楽は、音をオリジナルの視覚イメージで再現する。美術の模写なら、対象物を全体と部分とに分けて見て、一部を意識して一度目を閉じ、頭の中で再現し、描くときには、対象を見ずに、頭の中で意識的に視覚イメージを再現しながら描き、体育は、(できない場合には補助を付けて)理想的な動きをしているときに再現される体感を伴う視覚イメー

ジを意識する。つまり、動きが「できる」よりも、「分かる」ようにする。

このように、全教科を通して、一つの力・視考力に気づかせる学習方法を使うと、無理なく無駄なく効果的な思考力養成が誰にでも、どの教科でも、簡単に可能となる。これを私は「教育の統一場理論」と言っている。

知識が多く、処理が速いことを、考える基本と勘違いしていると失敗する。思考回路は、自力で工夫する時のみでできるからだ。自然に工夫をする状態にもつていくには、材料が多くてはいけないし、処理を急がせてもいけない。「せめて、計算だけでも・漢字くらいは」と思うのは、本末転倒であり、「まずは、思考回路を」なのだ。

最後に、「体と頭の制御力養成の違い」を確認する。

両者を混同していると、スポーツや楽器演奏の基本である反復練習を、反復練習が不要な思考でも、「基本は同じだから同じだ」と勘違いする。では、簡単に検証する。

頭の中で、全速で走って直角に曲がる
：完璧にできる。実際に、全速で走って

直角に曲がる：できない。思い(視覚イメージ)通りには、体は動かない。だから、体の制御では、視覚イメージと体の動きを一致させるために、徹底反復が効果的な基本となるのだ。何度も反復しながら微調整をして、「できる」ようになるからである。

ところが、勉強(思考力養成)は、視覚イメージの再現・操作そのものなので、最初から完璧。故に、基本は、体の制御練習とは全く逆で、反復ではなく、様々な視覚イメージの蓄積(多種多様な思考回路作成)なのだ。しかも、日常生活、遊び、勉強でも、自力で工夫する機会が極端に少なくなっている現代では、思考力養成とは関係のない、高速・多量・反復学習をする余裕のある子どもは、まずいないだろう。幼児・児童期の学習には、注意して欲しい。

今こそ、教育現場には、思考力養成の正しい理論が必要であるし、家庭には、忙しい生活と強い刺激で貧弱になっていく感味力を守るためのスローライフと、自力でオリジナルの工夫ができる日常的な遊びが必要となっている。

「九歳の壁」はあるのかーその乗り越え方

「九歳の壁」以降

人間は成長プログラムの中で、誰もが抽象思考をできるようにはなっているが、大事なことは、多様な思考力養成に最も効果のある、視考力を活用した思考力養成を続けることだ。考えるとは視覚イメージを操作することだからだ。そして、常に感味力を麻痺させないことが重要である。なぜなら、判断力は感情が育てるからだ。人間であるための判断力は、論理的思考結果や周囲の評価等ではなく、自分で納得しながら育てた自分自身の感情が、基盤になるべきであるし、事実、それが、最終的な抛り所となるからだ。